

④ 340, 341
⑦ 316, 338

⑧ 313

[欠番] ② 2660 ~ 2673 P

③ 391 P 2, 674

けう 稀有 = 稀有
めすらいこ 不足 議なこと

りう 682 壊滅元 363
ゆい 2263 由來 東

第四十四章

拍奴国壊滅

東の

小銅鐸の由来

銅鐸

かたどつた稀有な来歴につりて、

ま一度、

ふり返つて見てみる。

古代

中国殷代の日鈴は、鈕(吊手)をおよび

舌

鈴の内側上端から垂らされる。

棒

を備えていた。

梅原末治博士は

この殷代の日鈴が、
我が国の銅鐸の祖

型なの

という。

冒頭において既述

第三章へ銅鐸の項の

遼寧地方から朝鮮半島北部へ移り住んだ

その後の箕子(箕子)は、燕国から亡命して

きた衛滿に欺かれ、南韓へ下

新やい 一ノ目 東の拍奴国壊滅

由 47^P-4/5
 341^P-2/3 2,675^P

47^P-4/5
 341^P-2/3
 361^P-2/2 (11)

小町
 22^P

次頁
 から

リ、韓王を名のつた。
 といはれえ韓王（箕準）は、それから
 後の前六十年頃、海中の王になったようである。
 三国志に韓伝、馬韓条に、準と満戦、不敵也。
 其左官人走入海、居韓地、自號韓王。
 魏略曰、其子及親留在國者、因冒姓韓。
 氏、準王海、中、不與朝鮮相往來、
 其後絶滅、云々。
 とある。
 推察するところ、
 箕準は、海中の王となり、北九州。
 山口地方を領有した。
 と思われ、（第2、3表参照）「荒筋」第一編、および第
 二章「激動の黎明期」において既述。

朝鮮半島南端部

天つ注改行

ひまの 密 1867 P. 吉野の銅鐸
・松竹道跡
2679 P. 2,677 P.

いつぱい 銅鐸 135 無残 2148
つら 辛 1504 P.
た 銅鐸 1354 P.
トク

て銅鐸の文化が花開く(ことは、この後決)

と祈ったに違いない。

目印をつけ、
「いつか再び、掘り起す日が来ますように」

水ないと観念した時、箕子達は、
神ともあかめてきた祭器を、
かに、土の中に埋めた。(※松竹道跡、吉野、里道跡、他参照)

「でも辛く、堪え難い」
だが、
「倭人達の探索の目から遁れら

銅鐸の行く末を察せず、
「これまで大切に拝してきた祭器(小形銅鐸)

へ、倭人達に見つからないように、
「倭人達に見つからないように、
「倭人達に見つからないように、
「倭人達に見つからないように、

「それは、恐怖以外の何も

銅鐸の原料の入手先
〔初期は朝鮮半島、以後は中国北部〕

地方へ倭国大乱（一四七〇—一八八〇年頃）の最中の一五七〇年に延島郎が新羅国から中国近畿地方へ後代の目辺日本国へ渡来した。第一素戔

彥子達の国（百余国）の極南界の地から、無気味にも次第次第に領域を広げて来る倭国の侵略を食い止める為

中国・近畿地方の人々（当初の弥生人達）は

延島郎を拍収国王とした。

そして九州地方の倭国大乱に終止符が打たれた時、箕子達の時代と全く同様

口県と広島県との県境あたりが、倭国と拍収

国との国境とされたのだらう。

倭国と拍収国との文化は随分異なっていた。

互いに、全く相容れようとしなかった。

こうして、玉類

①鉄剣・銅鏡等を副葬する習慣を持った文化

圏（北九州を中心とする文化圏）倭人達の

②銅鐸を祭器とする文化圏（中国・近畿地方

ようになった

新や(2)-339P
あい
相容れよう
2
決て前妹

2.678P

表 157年 水 4-7-7 ⑤

11か あ
唯2/合う迄96P
至いたすあい反月すること

当初の弥生人達の

原材料

こと

こと

■ 今更、銅鐸作りを止めることなど出来得るものではない。

■ 銅の輸入先を、あちこちへ人を遣わし、青銅の入手先を探したに違いない。

■ そうしてついに、拍奴国は、どういう経路

なのかは不明ながら、中国北部の青銅（銕塊

状物）を輸入する途を開き、その後、

銅鐸終焉の時に至るまで、中国北部の青銅を

用いつづけたようである。（後述）

■ あるいは、もしかいたら、

決余系

① 近畿地方に居住する殷民の末裔たちの尽力

があつたから、中国北部の青銅を入手する

とが出来たのであらうか。

② また、中国北部の青銅は、朝鮮半島東岸

へ運ばれ、倭人達に奪い取らないう

うに、密かに新羅沖を経て、中国・近畿地方

へもたらされたのではなからうか。

などと想像される。

＊

1166P

2,680-1/2

spile 2,680P

1041P

水と砂
東南部向村
和村名99'

泊 高等地野

2,680^P-2/2

5 file 2680^P ② 2681^P-3/5 69
③ 2681^P-7/7 太いゴック
三ノ角神針鏡 成分スプリング

東京国立文化財研究所化学研究室長・馬淵
久夫氏は、昭和六十一年三月二十四日、
「弥生時代の文化を象徴する銅鐸の原料は
日本産でなく、初期（段階の銅鐸）は朝鮮半
島産であり、中・後期のものは中国北部産で
ある」と、銅鐸に含まれる鉛の測定結果にもとづい
て発表した。

銅鐸は銅、錫、鉛の合金だが、鉛には四
つの同位体があり、産地ごとに同位体比が違
うことに着目し、銅鐸の錆から取り出した
鉛を質量分析計にかけて比率を比べた。

この結果、鳥取県泊村などから出土した初期
銅鐸二点は、朝鮮製の鏡・剣などの遺物ハ矣
と比率がほぼ同じだった。

と、ころか、中・後期の銅鐸五十一点は、中
国の前漢時代（紀元前二〇二〜紀元後八
年）の鏡と、ほぼ同じ値を示した。

銅鐸は、これまでのところ日本からだけ出

天つき
改行

2と

ち

土一ており、日本製というの加定説になつて

いほ。

銅鐸の材料につりては、一部で、朝鮮製の

青銅器を鑄つて作つたとの説もあつたか

今日の研究で、少くとも中・後期につ

いては成り立たなくなつた。

また、初期（段階の銅鐸）は一樣に朝鮮製

中・後期のものは中国製ときれいに分かれて

おり、~~とや~~双方を混ぜた例も見つかつてい

ないことなどからみて、馬淵氏は、

んだ鑄塊状態で輸入されてゐたのであろう

と推定してゐる。

一方、同じ中国製でも、~~前二〇二~~後八年

後漢時代（二五〇年）とて、青銅

の鉛同位体比は違つてゐた。

現在の中国の鉛鉱山と比較した結果、

前漢時代の（青銅製品）産地は中国北部

後漢時代の鏡は中国南部、

とみられる

という。

*なお当初の弥生人達が鏡を重要視してゐたとは考えにくい

*畿内では出土する弥生時代鏡の鏡は全て九州からの搬入品

銅鐸が作られなくなった後に日本国内
 で製作された鏡は九州勢力に併合された後に
 作られた鏡のことであろう。は、中国南部の
 材料だ。た。な。のではなかろうか。
 ①なお、奈良国立文化財研究所研究指導部長
 佐原真氏は、
 「これまで私は、銅鐸を、最古・古・中・
 新の四段階に分類していった。
 今回の研究は、それを科学的に立証したう
 え、さらに分類を細かくして、
 ①最古段階と次の古段階の前半が朝鮮産、
 古段階の後半と次の中段階、および新段階が
 中国産である。
 ということが分る。
 調査資料の数も多く、データは決定的であ
 る。と思う。
 と述べている。(「朝日新聞」昭和六十二年三
 月二十五日付、「銅鐸の原料、輸入だった。初
 期は朝鮮、以後は中国に参照」)

(*)

②679¹⁴ 2.681^P-3/5

②680^P-3/5

トル

④ も、それが事実であるとするならば、

① 銅鐸の原料として、初期段階においては朝

鮮半島産の青銅が使用されていたというのに

② また、その切り替え時期は、いつのまに

郡産の青銅が用いられるようになったのだら

うか。

③ また、その切り替え時期は、いつのまに

ったのであろうか

と疑問に思われる。

■ ようするに、

へ仲哀九年(二〇〇年)十月

あ、新羅国が、倭国の属国となつたので、

この時点から以後、中国・近畿地方

の者達は、中国北部の青銅を輸入して、銅鐸

を作るようになったのであろうか

と考えてみたい。

は概略、

(1) 倭国大乱(一四七〜一八八)頃から辛卯年

(*)

神功皇后に5000

（三三一）迄は、朝鮮半島産の青銅が使用さ
れた。
（二）辛卯年（三三一）以降、拓跋國の壊滅（四
世紀後半頃）迄は、中国北部の青銅が用いら
れた、
というところなのではなからうか。（第一、3表参照）
なお、朝鮮半島のどの地点で青銅の原材料を採掘
していたのかについては、今提示できる資料を持っていない。
銅鐸文化圏であった中国・近畿地方に、
やがて、破局の時が訪れた。
銅剣・銅鐸の文化を誇る北九州・山口地方
の勢力（倭国）が、中国・近畿地方を席巻して
しまったものと思われ。
一方、先述のように、魏・西晋の属
国であった倭国は、引き続き、東晋（三一
七）四二〇）の属国であったと考えられる。
（第四十二章八七枝刀）の項において既述）
尚、晋書安帝紀の四一三年の条に、倭国が
朝貢記事が載る。
また、倭国は、中国の

文献に、
『晋書』
『宋書』
『南齊書』
『梁書』
などがある。

(1) 東晋(三一七〜四二〇)、都は建康(南京)

(2) 宋(四二〇〜四七九)、都は建康(南京)

(3) 南齊(四七九〜五〇二)、宋の禪譲を受け

た国。北朝の齊に対して、南齊という。

(4) 梁(五〇二〜五五七)、南齊の帝位を奪つ

て創設した国、

と続く国々は、皆、南朝である。

倭人達は、拘奴国(中国地方)を併合し、

母国(旧出雲国、近畿地方)に国譲りを強要

した後において、東晋(三一七〜

以降の伝統的流通経路を踏襲し、

へ中国南部から青銅の原料を輸入して、鏡

などを作り続けたのであろう。

と推察される。

つまり、

「銅鐸のあとに日本国内でつくられた鏡は

中国南部の材料だった」

というところも、素直に首肯し得る。このよう

に思われる。

また、銅鐸の意匠、青銅原料が、中国南部で採

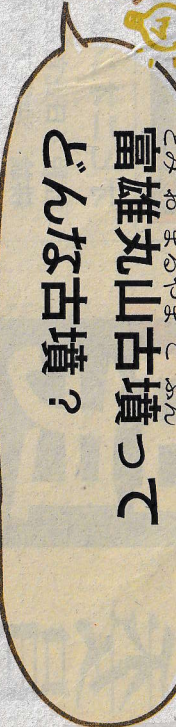
後2巻 94

2 (1)

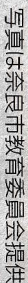
富雄丸山古墳

富雄丸山古墳って

どんな古墳？



今回見つかった粘土層



直径109¹⁰¹の円墳。日本最大の鉄剣^{てつけん}と銅鏡が出土した

[illegible]

出王した。
Q 頂上じゃなくて？
Q 調査が進むのが楽し
みだね。
A 頂上にもさらに大き
い粘土彫があったが、明治
時代に盗掘で壊された。そ
の時に出土したとされる品
々は今、京都国立博物館や
天理参考館にあり、「卑弥
呼」ではないね。（今井邦彦）

質問のテーマを募っています。あて先は wakaru@asahi.com

奈良市の田原から、日本最大の銅鏡が出土。

① 佐々木 文雄 (佐々木 文雄) 佐々木 文雄

彼等の子孫が、この高度な技術を馬区使にてこの鑽を作ったのかを知りたい。

② この青銅鏡の銘文には「中国南越王の可能性が高い」とある。

③ とはい、中国南部から九州を経て、近畿へわたったことだろう。

(第7卷) 474-2/3

朝日 令和6(2024)3.18(木)朝刊 33面

銅鏡・豎櫛が出土 女性を埋葬か 奈良・富雄丸山古墳

国内初の盾形銅鏡と、東アジア最大の鉄剣が出土した奈良市の富雄丸山古墳(4世紀後半)で、木棺の中から3枚の銅鏡や髪に挿す豎櫛^{たてこし}などが見つかった。市教育委員会が13日、発表した。副葬されることが多い刀剣や甲冑^{かっちゅう}などの武器が木棺内にはなく、女性が葬られていた可能性があるという。

同古墳は全国最大級の円墳。古墳北東部にある造り出し(突出部)で木棺を粘土で覆った粘土槨^かが見つかり、2022年からの発掘調査で、「鼉龍文盾形銅鏡」と全長237センチの蛇行剣が木棺

の上で重なるように出土した。昨年12月からは木棺を覆う粘土を取り除き、調査を進めていた。

木棺(全長約5.6メートル)の内部は3分割され、中央の「主室」(長さ2.4メートル)に被葬者が納められたとみられる。頭と推定される場所は水銀朱で真っ赤に染まっていた。足側には、竹製とみられる長さ14センチほどの豎櫛が9点あった。

3枚の鏡は、足側の「副室」(同1.3メートル)で重なって見つかった。上の1枚は三角縁神獣鏡^{さんかくふちしんじゅうきょう}の可能性が高い。

同古墳は頂上に一回り大きな粘土槨

があり、明治時代の盗掘や1972年の発掘調査で、鉄製武器や石製品が見つかり、三角縁神獣鏡も出土したとされる。今回の木棺には武器類がなく、市教委埋蔵文化財調査センターの鐘方正樹所長は「被葬者は女性では。墳頂部に葬られた男性が軍事や政治を担当したのに対し、祭祀を分担していたのかもしれない」と話した。

現地見学会は16、17日。また蛇行剣の保存処理が終わり、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で30日～4月7日に公開(1日休館)される。(今井邦彦)



富雄丸山古墳から出土した木棺。奥に鏡面を上にした銅鏡がある。奈良市、白井伸洋撮影

辛卯年(391年)

三〇史記 ①-71
②-128

2,682^P-1/2

三〇史記 1-60^P
改行

どうこう 元1566^P
動向

第7巻 181
新や(1)
-393

第二章 《百濟》 國王の挿げ替え 参照

■ なお、辛卯年(三三一)以降の新羅の動向

は、三〇史記に新羅本紀によると、ほぼ次の通りであった。

三〇四年二月、倭国が花嫁を求めてきたが、これを辞退した。
*百濟との決定的な違いは、ここにあらわないうか。

三〇五年、倭国が国書を送ってきた、国交を断絶した。
国の元首が、その国名を以てする外交文書を

三〇六年、倭軍が突然攻撃してきた。倭軍の食糧がなくなつた時、敗走させた。

三〇四年四月、倭兵が大挙して侵入してきた。倭軍が大敗して逃走する時、追撃して倭

の三〇二年春正月、高句麗が使者を派遣してきて、国交を開いた。

三〇三年五月、倭軍が侵入してきた。はさみうちにして、倭軍を大敗させた。

四〇二年三月、倭国と国交を結び、奈勿王の王子末斯欣を人質とした。

四〇五年四月、倭兵が侵入してきた。

正 金同位比 2681¹²/₁₅ 16分
H30(2018) 7.4(水) ~ 7.6(金) (4回)

2.682^P - 3/2

どうせ元
動静 1572^{ひん} 三D 1-75^P
神経 1145^{ひん} 尖す元 1587^P 60^P 8分

H29.7.15
4エツグした

・四〇七年三月、倭人が東部の辺境に侵入し
た。
・六月にもまた、倭人が南部の辺境を犯し、
白人を奪い掠めた。
・四一五年、倭人と風島(不明)で戦い、こ
れに勝った。
などがある。
・山ともあ水、辛卯年(三三一)以降も長期間
にわたリ、
へ倭国は、新羅の動静につりて、神経を小大
にゆたり、
うせていた。
と、いう情況がうかがえる。
・そんな争いに巻き込まれないようにする為
る青銅を、朝鮮半島からでなく、中国北部か
ら輸入し続けたのだらうか。
・加羅・百済に青銅原料を輸出したのだ
と、いたる北九州で倭国大勢力の銅鐸は朝鮮
半島で採掘したことを示す銅同位比のもの
が多数存在する筈であらう。
を待ちたい。

②2733¹/₂ 糸原市生野銅鐸/m660m
紋様「銅鐸」表紙 ②2681-3/5 2,683^P-1/2

三角銅鐸 500面
②2681^P 394^P
-3/11

もよう え
様 2203^P

銅鐸の文化
大型化する

銅鐸は、とどまるところを知らなにかのよ
うに、大型化の一途をたどった。

「朝日新聞」昭和六〇年十一月八日
付へ日本で最小の銅鐸（滋賀県彦根市出土）
および同、昭和六一年六月十九日付へ最古最
小のミニ銅鐸（福岡県嘉穂郡原田遺跡出土）

「これまで」に全国で約四百八十個の銅鐸が
出土しており、最小は滋賀県彦根市と福岡県
嘉穂郡原田遺跡から見出された五・五センチ高さ
↑↑↑↑最大は明治十四年に滋賀県野洲町で
出土した高さ百三十四・五センチのものである
という。

このように「銅鐸文化の最盛期には」一トンを超
える巨大な銅鐸も作られるようになっていた

そしてまた、巨大化した銅鐸の外表面に描
かれる紋様も、時とともに精緻の度合を増し

（一）大型銅鐸の正面には、単純化した模様となる（後述）

ひけ 1859?

2,683 P - 2/2

ハナギ 紀上128°

「銅鐸」
23/22P

すから 区柄 1182°
背景を地面 背景中の銅鐸
という。 全図トル

(*)

ていつた。
清らかな水が右へ左へゆつたり流れるよ
うな日流水文。トンボ・カマキリ・スツ
ボン。鹿狩・高床家屋・脱穀などの他の図柄
をあらわした美しい銅鐸。そのほか各種の精巧
な銅鐸が数多く作られた。
まさに、絢爛、華やかな銅鐸の文化が、花
と開いたのである。
すなわち、素も鳴の子孫達から、武器（ハナギ）
を蓄え、勢力範囲を広げて地盤を固めて
すなわち、素も鳴の子孫達から、武器（ハナギ）
では、同族の者同志、互いに競い合い、次第次
第に大きくて華麗な銅鐸を作るようになってい
った。
もつとも、素も鳴の子孫達もまた、神々
を祭るに相応しい煌びやかな銅鐸を作って、
隣接する国々には負けないぞし
とばかりの技術の粋を誇り示したに相異な
い。銅鐸作りにおいても、決して他の国に引
を取ってはいなかったようである。

41.6.9付 後日
HIV

spile 2684⁷ 41.6.29日

41.6.9

2,684⁷ P-1/2

足名推 ② 2467⁷ - 3/3
新やい 114頁の上

倭人の血筋を引く者達の母国の墓

■ 拘奴国

(中国地方)の東の母国(旧出雲国)

近畿地方

に於いて、着々とその領有域を拡大していった大己貴、少彦名(天穗日命)、

足名推、

およびその血を受け継ぐ者達の墓は

いったいどの地に作られたのだろうか。

■

それまで、それは分らない。

■

しかし、それと覚しき古墳なら、いくつか

■

挙げることが出来る。

■

奈良県桜井市内には多くの古墳があり、

こゝらを総称して纏向古墳群と呼んでいる。

・ JR桜井線巻向駅の西約四百メートルにある日

向石塚古墳は、周濠をめぐらせた全長約九

十四メートルの前方後円墳であり、くび小部の周濠

から出土した土器は纏向3型と呼ばれる形式

で、三世紀後半のものと考えられる。

過去、この古墳の調査では、三世紀中ごろ

前後と見られる同一型、同一型も出土している

コクヨ ケー20 20×20

5file 2684[?]

2,684^P 3/2

考古学界で最古の古墳とされてきた近頃の
箸墓古墳（三世紀末ないし四世紀初め）より
数十年前古いと分かり、纏向石塚古墳は最古級
であることが確認された、という。（「朝日
新聞」平成元年六月九日付）奈良・桜井の
「纏向石塚」最古級の前方後円墳（参照）
・なお、
「纏向石塚古墳の後円部の盛り土の中から
甕や高坏などの土器の破片が千数百点見つか
った。そのほとんどが、三世紀初め頃の口纏
向一式土器といわれる土器だった。同古墳周辺
でよく出土する形式の土器であり、近くの土
を墳丘の盛り土にしたことを示している」
という。

（一）参考に述べる、
「築造のずっと前から、周辺の土に古土
器が交じっていた可能性があり、盛り土であ
る墳丘から出土した土器で築造年代を決める
ことは出来ない」

天、生改行

とす
る見
解が
ある。

(2) ま 左、

の
土
中
に

こうはん

3世紀
始創

⑦ 鎌倉時代は、三世紀後半と考えるべきだ。

とすろ説かあはる

と
い
い
、
今
後
も
論
議
は
続
き
そ
う
な
あ
る
。 (一
朝

日新聲
L 平成八年十二月十二日付
S CM
〆 纏向石

古墳参照

通

2 石 箸墓古墳 全長約二八〇m は、三世

紀後半のものと
いわれてい
る（一）朝日新聞

平成十年九月十一日付
八幡基古墳
参照

京都府宇治市の南約五^里 城陽市寺田大谷

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

から四世紀初めにかけて築造されたとみられ

ており、最古級の古墳である可能性が強い

ふんきゅう
主

墳丘の規模は、南北約二十五メートル、東西約二

周田が削られているので形は確定し小

ていなか、高さは二メートル以上。

●墳丘のほぼ中央に埋葬部があり、南北四隅

二
の墓
と、
その
なか
に長
さ二
・三
メートル、

新和(2)
- 12/7
末2斤

「古鏡」 小林行雄 78

④ 2200-2/2 小林行雄 78
⑤ 2687-3/4 2は34

2,685^P-3/2

福岡県の中央 75°, 100°

⑥ 3表 427

幅の。七の木の棺の跡が確認され、多数の副葬品が出土した。

・出土品の中には、鏡や銅製品のほか、鉄製の槍鉾や錐などの工具類まであり、また壺に

は、三世紀中ごろの弥生時代後期の特徴を示す波状文や円形浮文があった。(三世紀中ごろ)

なお、九州の宇智山に地理的に相当するところ、畿内の宇治郡には、後世、豪族が

住んだであろうか。其ヶ原十二号墳あたりには、五世紀中ごろの円墳、方墳十三

基が点在している。

・其ヶ原十一号墳からは、三角縁神獣鏡が出土した。

④ さらに、其ヶ原十二号墳の南八キロには、三角縁神獣鏡三十二枚を含む、三十九枚の銅鏡

が出土したことで知られる。橘井大塚山古墳がある。(「朝日新聞」昭和六十二年七月二十七

日付) 八日本最初期の古墳か。京都・城陽市の其ヶ原十二号墳。古墳に小林行雄、学

生社、七八頁参照)

密か 1867 見 2125

2.686^P-1/3

2684^P-1/2 147 2439^P 2176^P-1/2 2200^P-2/2

2478^P-2/2

2176^P-1/2 2200^P-2/2

2681^P-3/4 147

相楽郡

京都府山城町椿井の口椿井大塚山古墳は

三世紀後半のものとみられ、前方後円墳の全

長は約一七五メートルである。(第三十四章へ天瓊

矛)。第三十九章へ茶臼山。の項において既

述

このように、近畿地方の最古級の古墳は、

奈良盆地から南山城地方(京都府城陽市あた

り)へかけての山あいに、一帯に築かれたようた

ある。低い墳丘

大己貴や少彦名や足名稚らの子孫達は、

倭國の高塚式墳墓と同様の墳丘墓(もしくは前方部(頭部)が極端に

墓を作っている)を、―――拍奴国人らに

見咎められてはならない。いろいろ詮索され

と考へ、細心の注意を払って、このような内

陸部の奥深くに、密に墓を作り続けたのであ

ろう。

つまり、

入倭国(北九州・山口地方)か拍奴国(中

国地方)を平定する以前に、母国(旧出雲国

2.686⁷ - 2/3

2687⁰ 2/3 新(1)-59Q 122

近畿地方の内に築かれ、
式古墳は、
ない。隠小墓と
う。想像される。
（第3図、注2において既述）

米

ていしや 鄭重 1517 P. 111 可 (1991) 悉く 2815 録 1394 427105
録 1676 2159 2,686 P. 3

たま 賜う 1395 報 日 46.3.18
改行

三角縁神獸鏡

これまで、卑彌呼の鏡として重視されてきた。この鏡は「三角縁神獸鏡」である。使者を遣わした「景初三年」などの年号「魏」の鏡とされ、リのものであることなどから、魏の鏡とされ、てきた。日 魏志倭人伝 景初二年（実は景初三年）（三九）十二月

条には「又特に汝に」
を賜い「皆装封して難升米・牛利に付す」
に到らば録受し「悉く以って汝が國中の人に示し」
鄭重に汝に好物を賜うなり
と記されている。
（第十八章）
朝貢の儀の項、他において既述

後国の朝廷は「これらの鏡を」各地の豪族に分けたと考えられている。
（「朝日新聞」）
平成六年三月十八日付「和馬台国」が「一

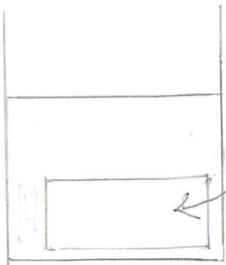
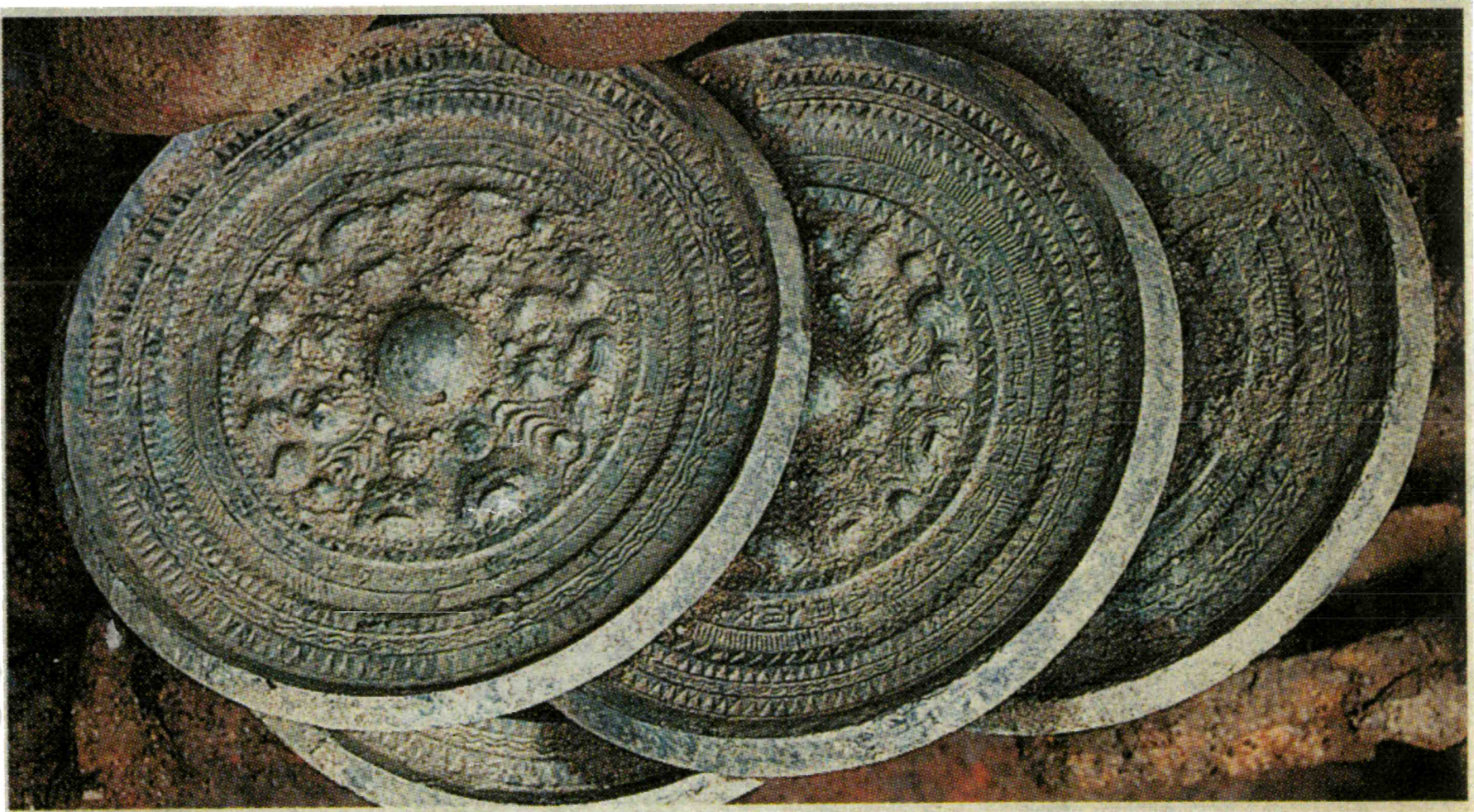
石（参照）

⑤ 2687⁰-7/8 11~13斤

⑫

(

右頁の右半分に
大主の掲載下刊。


$$2.687^p - 2/8$$


487

〔朝日新聞〕平成18年(2006)9月8日付<三角縁神獸入鏡が語るもの>参照
 外側から、三角縁・鋸歯文・覆紋・鋸歯文の順に並んでいる。
 伊賀図版 452 奈良県天理市黒塚古墳出土の三角縁神獸入鏡 (上)

少数ながら 年号をしるしているもの もあり

行雄氏はこの分布状況に初期大和政権の成立過程を推定する手がかりを求めた。

三角縁神獸鏡には中国三国時代の魏の年号 景初三年の銘文をもつ一面 島根県正始元年の銘文をもつ三面がある。

加茂町出土と

その他の図像文様の特長をあわせて明らかに中国鏡の伝統のなかで製作されたと分かる。製作されたものとそれを模倣して日本列島で

記載されている銅鏡百枚

前者には魏志倭人伝に卑彌呼が入

手した銅鏡百枚にあたるものも含まれて

いるとする説が有力なから、中国では三角縁神獸鏡が発見されていなく、最近すべ

てを日本列島製作とする説も主張されているという。『日本史辞典』東京創元社 八三

角縁神獸鏡(地参照) 日本国内で計約五〇〇面が出土しており

三角縁神獸鏡は、これまでこのところ多

から順に、京都の椿井大塚山古墳で三十四面

岡山の湯迫車塚古墳で十一面、福岡の石塚山

古墳および神戸の西求世塚古墳で各七面出土した。『朝日新聞』平成十年十二月八日付ヘーザーで「兄弟比較」朝日

額 5円

か！ 下賜 402円 2687-7/6 6円 2687-4/8

朝日 46,3,18

2687-3/末 2687-1/8 18行

といて 群馬・千葉から大分・熊本 までの広範囲に

新聞 平成五年七月九日付 西求世塚古墳 参照

三角縁神獸鏡のうち、同じ鑄型で作ったもの

が近畿を中心として分布している

邪馬台国に畿内説のよりどころとされてきた。

しかし、一九八六年に「景初四年」などありえない年を鑄造した三角縁神獸鏡が発見されるなど、最近はこの説に疑問をとなえる声が多くなっている。（「朝日新聞」平成六年三月十八日付参照）

それでは、三角縁神獸鏡については、どう

解決したらよいのだろうか。

いままで、詳らかでないが、この物語では、次のように考えてみたい。

景初三年（二三九）十二月、曹魏の朝廷は銅鏡百枚を倭国に賜った。（魏志倭人伝 参照）

もし、かいたら、この百枚は、景初三年、景初四年、正始元年の銘文をもつ鏡が含まれていたのかも知れない。

と、すでに述べた通り、倭国へ下賜するため特別に作ったものであり、その中に

Spile 2687^P-57

在ック済⑥
⑤ 1343

2.687^P-5/8

明治帝崩御景初3年1月1日
市町村誌 113^P
市町村誌 144^P

「魏の明帝の景初元年四月から用いられてきた景初暦」を、ふたたび元の夏暦（陰暦）へ戻すに当って、景初三年には十二月が二回置かれた。第十八章「景初暦」の項において既に述べた通り、一月とも「正始元年」とすれば、二度目の十二月は「景初四年一月」とも称された可能性はあるわけである。京都府福知山市広峯十五号墳出土、西宮市辰馬考古資料館の「景初四年鏡」の二面に「景初四年五月丙午」というのには、景初四年五月丙午と記されている。この銘文のうち、「五月丙午」というのは、景初四年五月丙午として古くから使われており、必しも五月につくたという意味ではない。付へ「景初四年鏡」は中国製、樋口京大名教授「日本生産説」に反論（参照）

ある、景初三年十一月に倭国へ下賜された。

所蔵
長馬 1998-34-0130
116.2.5(体)
AM 11:00 Tel
確認した。(女性)

2, 687^r - 6/8

2687^r
天啓

因みに述べると、

樋口隆康京大名誉教授は、景初四年鏡二枚を
詳しく調べた結果、

景初四年とあつても、魏鏡に間違いない

と断定した。
鑄造の技術、模様、形式論を展開、さらに、

これまで日本人学者があまり論及しなかつた「景初
四年」があつた可能性を指摘している。

魏の明帝は景初三年一月一日に亡くなり、翌年

一月は景初四年一月とせず「景初三年後十二月」
とし、翌月から新しい正始の年号が始まった、と

魏志には記されている。

これについて樋口氏は、
「魏志は後世編集されたもので、間違ひもある。云々」

と述べている。「朝日新聞」昭和六年六月十日付「景初四年

鏡やはり中国製」樋口京大名誉教授「日本生産説に反論」
参照

ともあれ、景初三年中に魏国内で作られ、倭国の女王卑彌呼に下賜さ

5637A

2686-7/3 551
群馬 4群

2687-7/8

複製 1929
拝受 1962
感謝 1988

れた銅鏡百枚のなかに、景初四年に銘文をもつ鏡が含まれていたのではなからうか。
[2] 倭国の朝廷は、百枚の銅鏡などを悉く以て國中の人に示し、与えた。
倭人達は、特に銅鏡を有難く思い、感謝して拝受した。
[3] ここに倭国の朝廷は、「三角縁神獸鏡」を模倣して複製品を多数作り、各地の豪族達へゆきわたるように配布したのであろうや。
こうして、
[4] 三角縁神獸鏡は、四世紀（倭国が中国近畿地方を平定した前後の頃）の古墳に副葬品として埋納された。
と解される。
倭国の属国となつた東の「母国」(大己貴命)が統括する近畿地方でも、数多くの三角縁神獸鏡が副葬された。
また、日本列島の統一がすすんだ頃にも各地で三角縁神獸鏡の埋納が続けられていた。
左の想像図を参照する。

景初三年

景初四年

正始元年

